
俺は俺を殺すお前を生かす

市村 鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は俺を殺すお前を生かす

【Nコード】

N0588Z

【作者名】

市村 鉄

【あらすじ】

右眼を眼帯で覆った剣士・アルヴィスは、一年間隔で訪れる『呪われた力の暴走』に危惧しながら世界各国を転々と旅をしていた。そんな彼の前に帝国兵から必死に逃げる少女・カルラが現れる。彼女を助ける代わりに、ひとつだけ頼みを聞いてもらうという条件でアルヴィスは彼女を助ける。一方、託宣によってカリエスコ帝国が八人の戦士によって滅ぼされると告げられた皇帝・クロノスは、その戦士の先頭に立つ可能性のある者を片っ端から排除していく。アルヴィスとカルラの二人は帝国からの刺客をやりすごしながら仲間

を集め、帝国と立ち向かうことを決意する。

く過去く

少年が父と母の本当の息子ではないと教えられたのは、彼が九歳のときだった。

まだ赤子同然だった彼は、誰一人として住んでいないはずの荒野で、静寂を嫌がるように大声で泣いていたのだという。

そこを馬車を引いた商人の男が偶然通りかかると、泣いている彼を不憫に思い自分の村まで連れて帰り、妻と共に我が子のように育てたのだそうだ。

すすすくと健康に育った少年は血の繋がらない父と母を愛し、彼らもまた血の繋がらない息子を愛していた。

血が繋がっていないことを打ち明けられても少年の気持ちはたいして揺らぐことはなかった。

自分を捨てた両親の記憶は一切なかったし、なくてよかったと思つた。おかげで自分の両親はこの二人なんだと思いつけることができたのだ。

父と母との別れが訪れたのはその三年後であった。

満月がその青白く輝く光であたりを満遍なく照らす晩、彼らの住む村は突然に襲われた。

静けさが途端に悲鳴と罵声で溢れ、村は瞬く間に火の海と化した。

父と母は恐怖に震える少年を部屋の奥にある物置に隠し、ただただじっと目を瞑り、手を組んで祈っていた。

家の扉が乱暴に開け放たれる音が聞こえ、同時に下卑た男達の笑い声が少年の鼓膜を震わす。

父の懇願するような声が、次に知らない男の声が聞こえ、続いて何か倒れるような音と同時に母の悲鳴が聞こえた。

嫌な予感がする。

少年は勇気を振り絞り、恐怖で固まってしまっている筋肉に精一杯の指令を出して物置の戸を少しだけ開けた。

知らない男が数人、歯を剥いて笑っている。手には皆、剣を持ち、身体は鋼の鎧で覆われている。

少年は一番手前に立つ男の足元に目をやり、息を呑む。

(……父さん?)

父が血まみれで倒れ、その隣で母が泣いていた。

少年は思わず声を上げそうになったが、できなかった。混乱し、声の上げ方がわからなかったのだ。

父を殺したであろう男が剣についた血を振り払い、母にその剣先を向け、何かを話しかける。しかし母はすぐに首を横に振る。

すると男はいやらしく口角を吊り上げ剣を手にした右腕を振りかざすと、母に向けて一気に振り下ろした。

あたりに赤い液体が飛び散る。

その中心でうずくまる母はピクリとも動かない。

「あ、ああ、ああああああああ!!」

少年は震えながら絶叫していた。

怒りが、憎しみが、そして悲しみが少年の身体を熱く包み込んでゆく。

吐き気がするほどの不快感が腹の奥にずしりとのしかかる。本当に吐いてしまいそうな感覚に包まれたとき、少年は意識を失った。

人が目の前で死ぬのを初めて見たのは少年がまだ十二のときだった。

そして、少年が人を殺したのもその日が初めてであった。

〜託宣〜

「リア殿下が託宣を授かったというのは誠か!？」

宮殿内を慌しく走り回る神官の一人をつかまえて元老ドルウクは早口に問いかける。

いきなり腕をつかまれた神官の男は眉をひそめながら億劫そうに振り向いたが、ドルウクの顔を見るや否やその顔を正し深々と頭を下げる。

「ドルウク様でしたか。託宣が下ったのは確かです」

頭を上げドルウクの目を見てはつきりとした口調で答えた神官は「……ですが」と言うと、目を伏せ何事かを逡巡するようなそぶりを見せる。

「なんだ？ 何かまずい未来なのか？」

いまだに目を伏せる神官に対してドルウクは少し声を落として問いかける。

「それが、この内容に関してはまだ誰にも告げるなど皇帝陛下が申されまして。陛下自らみなさんに告げる故、我々は元老様方と大將軍閣下を宮殿にお呼びするよう申し付けられました」

申し訳なさそうにそう話す神官に「そうか」とだけ言い、自分の仕事に戻るよう促した後、ドルウクは謁見の間を指して足を進め始めた。

元々、ドルウクがこの宮殿を歩いていたのも皇帝の召集を受けてのことであった。その際、伝令役の使用人は託宣が下ったとだけ言い残し、去っていったのでその内容までも聞けていなかった。

(まあ、問うたところで先と同じ返答だったであろうがな)

(しかし、大將軍まで召集されるとは、戦争でも起きるのか)

託宣の内容を軍人が皇帝の口から直接耳にするなんて事態は前代未聞である。そのうえ神官どもの狼狽ぶりを見れば嫌でも悪い予感

が頭をよぎる。

謁見の間の扉を開け、ドルウクは足早に中に入っていく。扉の側から奥へと伸びる長方形のテーブルの周りに用意された二十一の椅子は他の元老たちで既に半分近く埋まっていた。普段はテーブルも椅子もなく、ただただ広いだけのその部屋がやけに窮屈に思えた。ドルウクはその並べられた椅子の一番奥の席に腰をかける。といつても実質の一番奥の席は皇帝陛下が座るであろう玉座なのだが。

ドルウクの入室後まもなくして用意された席がすべて埋まった。最後に入ってきたのは大將軍コーネリウスであった。

きれいな顔立ちに鋭い目、背中まで伸びる長い艶のある黒髪をすべて後ろにまわし、それを編んで一本の束にしていた。大將軍という地位は産まれに関係なく、その実力と人間性のみを評価され就くものである。齡二十五で軍隊の頂点に就くという異例の出世を成し遂げたコーネリウスだが、その実力は本物であることは確かだ。

しかし、彼が呼ばれていることを聞かされていない元老たちは皆、訝しげな表情でその男をねめ回す。

カリエスコ帝国では元老院と軍隊は友好的関係とはお世辞にも言えなかった。

そんな視線を無表情でやり過ごし、その男は唯一空いていた一番手前の席に腰を下ろす。

少しの間があり、元老たちはそれぞれ眉をひそめてひそひそと話をしていたが、ドルウクたちが入ってきた扉とは反対の側から、数人の侍従を連れた男が入ってくると皆が表情を引き締める。と同時に一斉に椅子から腰を浮かし、膝を床につけ頭を垂れる。

カリエスコ帝国の皇帝クロノスだ。

口ひげを蓄えた壮年の男で、黒い髪を短く刈り、派手に着飾った衣装の上からでもはつきりとわかる太い首と、それに見合ったごつい身体。

見た目だけでいえば皇帝というよりも軍人のほうがよっぽど似合う。だがその男の放つオーラは人並みではないことを、ドルウクは今まさに再確認させられていた。

「よい。座ってくれ」

口を開いたのはクロノスだ。

腹に突き刺さるような低い声でそう言うと、他のそれよりは明らかにクツション性に優れているであろう派手で大きな玉座に深く腰を下ろした。

それを確認してからドルウクをはじめとする他の者達も腰を下ろす。

「さて、すでに知っておると思うが、今回皆を招集したのは先日フォルトウナ様より承った託宣についてだが」

帝国国民が崇める唯一にして絶対の神・フォルトウナ。

幸運の女神として信仰されるフォルトウナは年に数回、託宣の巫女の夢に現れ、未来を伝える。その巫女というのがこの国の皇后・リア殿下なのである。

「この国に存続の危機が訪れるそうだ」

淡々と、危機感を感じさせない口調で話すクロノスの言葉の意味を理解するのに数瞬かかった。

そしてそれを理解した上で皆、眉をひそめて次の言葉を待つ。

謁見の間において、皇帝陛下の御前で許しなしに発言することは禁じられている。つまり、許しが出ないということはまだ陛下の話は続くということでもあるのだ。

それを妨げる愚か者はここにはいない。

ドルウクをはじめとする二十人の男たちは逸る気持ちを抑え、次を待った。

「フォルトウナ様曰く、

『月が赤く染まり、大地を焦がさんと照らす晩、この国は八人の戦士とそれに導かれる者達の手によって滅びるだろう。戦士達の先頭に立つは、死を食らう冥界の王の力を右眼に宿した青年と、穢れなき心を持って魔人族を率いる少女である』ということだ」

クロノスが託宣の内容を変わらない調子で読み終えると、周りの者が一斉に息を呑むのがわかる。

魔人族。

姿かたちは人間のそれと変わりないのだが、彼らには特別な力が備わっていると昔から言い伝えられ、恐れられていた。それは神をも殺す力として……。

情報が確信を得ていないのは、今を生きるほとんどの人間がその存在を、そしてその特別な能力を見たことがないのだ。しかしその存在を肯定するものも少なからずこの帝国には存在している。

彼らは我々人間がなかなか足を踏み入れることのない高地や、森林、沼地などに集落を作って生活しているらしい。

(しかし、今まで我等に干渉してこなかった種族がなぜ……)

ドルウクは眉をひそめる。

(それに魔人族と共に先頭に立つという剣士とは一体)

「我等を敵に回すとは愚かなことである。それを世に知らしめる良い機会ではないか」

不敵に笑うクロノスが沈黙を破る。

堂々とした声とその迫力はドルウク達の不安を一掃した。

く暴走く

いつもそうだ。

鼻をつく死のにおいで目が覚め、手に嫌な生温かさを感じ、重たい身体に鞭打って上半身だけを起こし、自分を中心に広がる惨状を目の当たりにし、息を呑む。

まるで、この世には自分しか存在しないのではないかと錯覚してしまうほどの静寂に身を包みながら、右眼を真っ黒な眼帯で覆った少年・アルヴィスは徐々に落ち着きを取り戻してゆく。

右手に握り締めた剣はその漆黒の刀身を紅に染めていた。

「また、か……」

夜の闇に消え入ってしまったいそうなほど彼の声は小さく、そして悲しみに満ちたものであった。

天に浮かぶ満月が青白い光を遠慮がちに浴びせてくる。

アルヴィスはしばらく座ったまま動く気配を見せなかったが、一度大きく嘆息するとひざに手を当てながら立ち上がった。そしてあたりを転がる死体を一つ一つ確認するようにいちいちしゃがみこみ、その顔を見てまわる。時折、目を剥いたまま事切れた死体の臉を手で閉じてやりながら。

途中、自分が旅に持ち歩いている荷袋が落ちているのを見つけた。中身を確認し、紐を肩にかけて再び作業に戻る。

死体は全部で二十程度であった。そのどれもが皆、屈強な体をした男で、手には武器を握り締めていた。

自然と溜め息が漏れ、はっとする。

(俺は今、安堵したのか?)

(こいつらは命を落として当然だと、そう思ったのか?)

どうにもならない疑問で頭の中をこね回し、嫌悪感に襲われる。

ガイウス。

このグランディア大陸の大半を支配下に置くカリエスコ帝国の手が及ばない土地で盗賊団を結成し、力を持たない村や行商人などを狙って襲う者達の総称としてそう呼ぶ。

アルヴィスの周りに転がっている死体は恐らくすべてそのガイウスである。

彼らに出会ったのはただの偶然だった。

力の暴走の日が近いのを悟り、村で大量の保存食を買占め、誰にも会わずに済むように人気の無い荒れ果てた地で時が来るのをじっと我慢していた。

それなのに、よりもよって暴走の当日、ガイウスの連中に出くわした。

少し何かを会話した気がするがほとんど何も覚えていない。

意識が途切れ、目を覚ましたときにはこの有様だ。

目を仰ぎ、少し攻撃的に吹く風に身を浸す。脇腹に浅い傷があり、血が胴衣を濡らしていくのがわかった。傷自体はたいした痛みではなかったが、生温かい液体が肌を伝うこの感覚は嫌いだった。

自分の荷袋から純白の包帯を取り出し、傷を覆うようにしてぐるぐると巻いていく。何周か回して血が滲まなくなったら、それを干切って肌と包帯の間に食い込ませて固定する。一連の作業を慣れた手つきでこなし、再び荷袋を担いでアルヴィスは歩き出した。

しばらく歩いていると空が白み始め、陽が今にも頭を出さんと彼方の稜線が輝き始める。

アルヴィスには行く当てなどなかったが、今までもそうやって適当に歩き辿り着いた村や街で適当に金を稼いで生活をしてきた。普通に働くこともあったが、剣の腕には少なからず自信を持っていたので、時には賞金目当てで剣闘大会に出場したり、またその腕を買わせ、貴族の護衛としての任に就いたり、様々なことを経験してきた。

しかし一年以上同じ地に足をとどめておくことは絶対になかった。

力の暴走はおよそ一年周期で訪れる。

意識が飛び、無差別に周りの命を奪い、殺し尽くして意識が戻る。アルヴィスにとっては悪夢以外の何ものでもなかった。

しかし、殺す者がいなければこの暴走も起こらない。正確には暴走が起こってすぐに意識が戻るわけだが、この場合も後の一年間は安心できる。

暴走はアルヴィスの持つ力のマイナスの部分でしかなく、真の力は別のものであることを彼は身をもって理解していた。しかし、その力もまた彼を悩ます要因の一つになりつつあった……。

く遭逢く

歩き始めて半日ほど経っただろうか。

夜明けと共に歩き出し、途中、大きな水溜りで血のついた服を洗ったぐらいで、ほとんど休むことも無く地を踏み進め、今では陽の最後の破片が押し潰されようとしている。いつの間にか足元はごつごつとした荒地から、夏草の生い茂る緑の地へと変わっていた。

アルヴィスは一度大きく息をつくと足を止め、近くの喬木に背を預けて座り込む。

(さすがに疲れた)

(……今日はもういいか)
疲れきった身体が重力に抗うのをやめてだらしなく垂れる。

陽は完全に沈み、それを待っていたかのように夏虫たちがきれいな音色を奏で始める。いや、陽が沈む前から鳴いていたのである。が、歩きながらではあまり気を引くものではなかったのだろう。

火を焚くための枯れ木を探しにいこうと立ち上がろうとしたとき、暗闇の奥で草を踏む音が聞こえた。

左眼だけで半眼を作って音のほうへと視線をやる。

(一人?……いや、後ろに大勢いる)

(……追われてるのか?)

立ち上がりかけた体勢のまま、アルヴィスは腰の剣に手をかける。ひとつの気配がどんどん近づいてくる。鞘から漆黒の刀身が少し顔を出し、月の光を浴びて輝きを放つ。

刹那、草を掻き分けて影がひとつアルヴィスの前に転がり込む。比喻ではなく、文字通り地面に顔出した木の根に豪快に蹴躓いた少女が、小さな悲鳴とともに転がってきたのだ。

その光景に啞然として剣を抜きかけた状態で固まってしまふ。少女は一瞬痛みに顔を歪めていたが、アルヴィスの存在に気づくと、はっとした表情を作りあわてて立ち上がった。

青白い月の光に濡れる少女はアルヴィスよりも一回りほど小さく、栗色の髪は、腰まできれいに伸びた後ろ髪と、肩にかかるかどうかの横髪に結ばれた真っ白なりボンが特徴的であった。アルヴィスを警戒するように見つめる大きな瞳はすこし潤んでいるように感じられた。

何を言うつもりだったのかはわからないが、アルヴィスが口を開けようとした瞬間、嫌な気配を感じ、思いとどまる。

殺気だ。

(……困まれた)

(というより、巻き込まれた……)

意識を失っていても暴走では身体は動いている。つまり昨日からアルヴィスの身体は一睡もしていないのだ。疲れきった身体を一刻も早く休めたいアルヴィスは心底気が滅入った。

鞘から剣を抜ききって両手で持ち右足の前に剣先を構える。目の前の少女が息を飲むのが分かった。

「ああ、心配すんな。別にあんたを斬るつもりじゃないから」

「え?」

案の定、少女は困まれていることに気づいていないようで、アル

ヴィスの言葉に目を丸くする。

「あなたは……」

少女が何かを言いかけたが、それに応える余裕は無かった。アルヴィスは一瞬で少女との間合いを詰め、それを受け止める。

金属と金属がぶつかり合う音が夜の暗闇にこだまする。アルヴィスは顔の正面で刃を噛ませながら相手を左眼で鋭く睨む。全身を闇色のローブで覆い、フードを深々と被った男が立っていた。

「穏やかじゃないね、どうも」

「邪魔立てするなら貴様も命は無いぞ」

しゃがれた男の声は不快にアルヴィスの鼓膜を揺らす。

「俺を殺す、か。この人数で？」

アルヴィスは不敵に笑い、「もつとも、何人連れてきても無駄だろうけど」と小声でつぶやく。

もう一度金属音がこだまし、男が後ろに跳び下がる。剣から右手を離し、その腕を小さく持ち上げると暗闇から鋭い殺気を放った影が二つ飛びかかってきた。

一撃目を受けたときから呆けたままの少女を左手で自分の正面に引っ張り込むと、アルヴィスは腰に差した鞘を左手で抜き取り、少女を左眼で見据えたままその手を振りかぶる形で後方からの斬撃を受け止める。間髪いれずに左から別の影が少女を狙って突きを放つ。剣を持つ手で少女の服を掴んで引っ張ると、同時に漆黒の刀身が一閃し、影が地面にうづくまる。

まず一人。

剣を振るい、身体を捻ったことで、後方の敵を受け止めていた鞘

から重みが消える。今まで鞘で受け止められていた男は飛び下がり距離をとる。と、同時に突きを放った男とは反対の闇からもうひとつ殺気が飛び出す。アルヴィスはそれに気づかないふりをし、ぎりぎりまで引き付けて一瞬で薙ぐ。

二人目。

アルヴィスは最初に襲ってきた男を正面に見据える形で仁王立ちする。足元にはうずくまった影が二つ、隣には未だ目を丸くする少女、後方には影が一人、姿を見せていない殺気がまだいくつか感じられた。

(守りながら戦うには片目じゃしんどいか……)

(そもそも俺はなんでこいつを守るんだ?)

もつともなことを思い出し、不意に笑みがこぼれ、少女が眉をひそめる。

(ま、別にいいか)

「さて、あんたらまだやんの?」

正面で微動だにしない男に向かって声を投げかける。

男は答えなかった。代わりに再び右手を掲げると、暗闇から殺気を纏った影が三つ現れ、アルヴィスと少女は文字通り囲まれる形になった。

相手に全く引く意思がないとわかると、アルヴィスは大きく嘆息した。そして右眼に被る眼帯の紐を解くと、はずした眼帯を少女に預ける。

「ちょっとこれ持ってる」

少女の顔を見てそう言うアルヴィスの右眼を見つめ返し、少女は

息を呑む。

アルヴィスの右眼は、茶色の瞳をした左眼と違い、まるで獣のそれを思わせる澄んだ紅の瞳をしていたのだ。

「あ、あの、その眼は……」

おどおどしながら少女は声を絞り出した感じだった。

その言葉をアルヴィスは聞こえていたが応える余裕はなかった。

五つの影が一斉に剣を手に襲ってきたのだ。

アルヴィスは左手の鞘を地面に放ると、その手で少女の手を掴む。少女の手を引つ張りながら敵の斬撃を避け、一人ずつ、確実に倒していく。視界が広がったことで先ほどの戦闘とは天と地ほどの差があった。

途中、少女が危ない場面も数回あったが、それでも全員倒すのにそれほど時間はかからなかった。

く対話く

「あ、あのー！」

勢いよく燃え盛る焚き火の向こう側から、おどおどした様子の声が飛んでくる。

「ん？」

アルヴィスは、以前滞在していた街で買い込んだ干し肉を頼張りながらその声の主に目をやる。

カルラと名乗ったその少女は、分けてやった干し肉を持った両手に視線を落としてもじもじしていた。

「助けてもらっておいてこんなこと言うのは失礼だと思っんですけど……」

そこまで言って口ごもる。

「いいよ。別に怒ったりしねーから」

半ば呆れ返った口調で先を促す。

謎の集団に襲われてから、とりあえず場所を移すまでの間、カルラの話し方はずつとこの調子であったので、結局まだ彼女の名前しか聞けてなかった。

お互い聞きたいことが無いはずがなかった。少なくともアルヴィスの方には聞きたいことがいくつもあった上に、眠気もあったので、いちいちこの不思議な空気を作られるのは好ましくなかった。だが、それを注意しても逆効果にしかならない気がしたので、カルラが慣れるまでこのやり取りに付き合うことにした。

「……ど、どうして私を助けてくださっただんですか？」

「そりゃあ、あんたが俺の前で派手にすっころんだせいだ。あのまま普通に通り過ぎてくれれば俺は助けなかったんじゃないかな」

冗談口調で話したが、嘘ではなかった。元々、正義感も好奇心も

強くないことは自負していたし、何より疲れていた。わざわざ追いかけてまで首を突っ込む気は起きなかっただろう。

ただ、目の前で女の子が殺されるのを眺めていられる度量は持ち合わせていない。それだけである。

それをどう受け取ったのかは知らないが、カルラは自分がこけたことを思い出したのだろう。頬を赤く染めて俯いた。

「で、次は俺の質問な。お前は どうして追われてたんだ？」

カルラをこのままにしておいたら永遠に話が進まない気がしたので強引に意識をこちらに引き戻す。作戦は成功したようで、カルラは顔を上げ話し始めた。

「え、えと、あの人たちは帝国の刺客さんなんです」

「帝国？ 何やったらあんたみたいな女の子にあんな物騒な連中仕向けるんだ？」

アルヴィスは半眼を作ってカルラの次を待った。

カリエスコ帝国は世界トップクラスの軍事国家だ。国土と兵の数にものを言わせ、今まさに世界統一に繰り出そうとしているような国が、こんな女の子一人にかまうだろうか。

(しかし、帝国軍ならあの集団の連携のよさも納得できるか)

(やっぱり殺しておくべきだったか……)

アルヴィスは彼らにとどめをささなかった。全員満足に動ける傷ではなかったし、殺しはもう懲り懲りだった。

しかし相手が誇り高き帝国軍となれば、邪魔立てしたとして自分も狙われる可能性が生まれるのだ。ただでさえ悪目立ちする特徴を抱えているのに、お尋ね者などになれば目も当てられない。

今更どうにもならないことを頭の中でこね回していると、カルラが口を開く。

「何もやってないんですが、これからやるそうなんです」

「……ん？」

アルヴィスは眉をひそめる。

「わ、私も詳しくは知らないんですけど、た、託宣とかいうので出たらしいんです！」

眉をひそめた顔が怖かったのか、カルラは慌てた様子で両手を前でぶんぶん振りながら話す。しかし、その奇妙な行動には目もくれず、アルヴィスは顎に右手を当て考える。

託宣。

アルヴィスには聞いたことがあった。なんでも、神のお告げが聞こえる巫女さんが未来を予見するってぐらいの知識のだが、おそらく間違っではないだろう。

託宣が覆った話は今まで聞いたことが無かった。つまり、今日アルヴィスが彼女を助けるのも事前に決まっていた運命ということになる。

(胡散臭い話だな)

「で、その内容とか聞いたのか？」

視線をカルラに戻し、できるだけ怖がらせないように落ち着いた口調で尋ねる。

しかし、カルラは弱弱しく首を横に振ってから、俯いて「ごめんなさい」と消え入るような声で謝った。

謝る必要は無い、と微笑んで見せるとカルラの顔が少し明るくなった。

焚き火が散らす火花の音が心地よくアルヴィスの鼓膜を揺する。

「あ、あのお」

炎を見つめながら、特に何も考えずぼーっとしていたアルヴィスはその視線をカルラに移す。

「なんだ？」

「脇腹、怪我してませんか？」

一瞬何を言われているのかわからなかったが、自分の脇腹を見て理解する。裂けた布の隙間から血の滲んだ包帯が顔を出していた。

「ああ、大丈夫。もう血は止まってるから」

「少し見せてもらっても良いですか？」

そう言ってカルラは立ち上がり、アルヴィスの隣に膝をつくとき、両手を傷口にかざして目を瞑る。特に嫌がる理由も無いので、アルヴィスはその様子を怪訝そうな表情で見つめていた。

すると突然、カルラの手元が黄金色に輝き、傷口が妙な暖かさに包まれた。光が消え、カルラが手を離すと傷の痛みが完全になくなっていた。

不思議に思い、上着を脱ぎ、包帯はずしていく。完全に包帯をはずしきるとアルヴィスは目を丸くする。傷が跡形も無く消えていたのだ。

「これは一体……」

傷のあった箇所を手のひらで何度も確認しながら隣のカルラに視線をやる。

「私、魔族なんです」

そう答えたカルラは満面の笑みで、アルヴィスが見た彼女の最初の笑顔だった。

く交渉く

薫る夏草と小鳥達の鳴き声で目が覚めると、陽はすっかり昇りきり、その過ぎた恩恵を、揺らめく木の葉の隙間を縫って、アルヴィスの虚ろな瞳に容赦なくぶつけていた。

眩しさに顔をしかめながら、未だ若干たるさの残る身体を起こすと、いつも通りはねた黒い髪を搔いて、昨日の焚き火の跡を半眼で眺める。

(……寝すぎたか)

(疲れてたんだ、しょうがないか)

朝は特段弱いというわけでもなかったが、昨日いろいろありすぎたせいか、脳が眼を覚ますのに少々時間がかかった。

(力の暴走があつて、おかしな奴が現れて、そいつを狙うおかしな奴らと戦って、おまけに魔人ときたもんだ……)

「カルラ!?」

ようやく脳の機能が正常に戻ったアルヴィスは無意識にその名を呼んでいた。

「は、はい!」

直後に、すぐ隣で座ったまま驚いたように肩をびくつかせたカルラが裏返った声で返事をする。その姿を確認するとアルヴィスは大きく息をついて安心し、小さく苦笑する。

「そんなとこでなにしてた?」

左手で眼帯の着いていないほうの目を擦りながら、首だけを捻ってカルラを見る。

「え！？ ええつと、その、アルヴィスさんがなかなか目を覚まさないので寝顔を拝見させてもらってました」
そう言ってカルラは照れくさそうに目を伏せる。

(他人の寝顔見て何がおもしろーんだ?)

アルヴィスは呆れたように息をつき、ゆっくりと立ち上がった。

「近くに川あったよな？ ちょっと顔洗ってくるわ」

そう言ってゆっくりと歩き出すアルヴィスの後ろを、カルラがひよこひよこことついて来る。怪訝な顔で振り返り、カルラに無言で問いかける。

「私も一緒に行きます」

屈託の無い笑顔でそう言うカルラを拒む理由も無いので、わかった、の意味を込めて右手を軽く挙げる。

(なんなんだ？ 懐かれたのか?)

そんなことを考えながら半眼を作ってもう一度カルラを振り返る。その行動の意図が分からないカルラは、眼を丸めて首を傾げる。その様が以前、アルヴィスに懐いていたりスのそれと重なって見え、苦笑する。

(勘弁してくれ……)

「で、お前これからどーすんだ？」

濡らした顔をタオルで拭いながらアルヴィスが尋ねる。

「村、焼かれちまったんだろ？」

すぐに答えが返ってこないのを確認し、付け足す。しかし先ほどより、僅かに声のトーンが下がったことに自分でも気が付いた。

カルラは昨晚、自分が村を出たときの話を聞かせてくれた。

帝国が軍を出撃させ村を襲撃したこと。数で圧倒され、なすすべなく村は焼かれ、民は殺されたこと。族長の娘であったカルラを種族の誇りと尊厳にかけて死なせるわけにはいかない、と皆が自分だけを逃がしてくれたこと。

そして、自分は村のみんなの想いを無駄にしないためにも、立派に生きるのだと。

「そのことでひとつお願いがあるんですけど……」

言い淀むカルラの顔を怪訝な顔で見つめて、次を待った。

「わ、私を守ってくれませんか!？」

「断る」

文字通り即答だった。アルヴィスは昨晚の話を聞いて、もしかしたらとは思っていたが、お願いがあるなどと改まって言われれば、大体想像はついていたので即答が可能だったのだ。

自分の頼みを言い切ったことで即答に反応できなかったのだろう。

カルラは懇願するような顔をやめようとしなない。

アルヴィスは一度嘆息し、再び口を開く。

「だから、断る」

今度ははつきりと伝わったようで、カルラが狼狽する。

「え!？ 断るって、ど、どうしてですか？」

考えられないといった様子で問うカルラを呆れた顔で見る。

「逆に断る理由はいくらでもあるけど、受ける理由がねーよ!」

(一体俺をなんだと思ってるやがる)

呆れ過ぎて苦笑が漏れる。

「で、でもっ、昨日は殺されそうなところを助けてくれたじゃないですか!」

カルラの言葉に少し熱がこもるのがわかった。

「あれは仕方なく、だ。それに今回は昨日とは状況が全く違うだろうが」

あまり口論が激しくなるとカルラが泣いてしまいそうなので、とにかく落ち着いた声で返すことに気をつける。感情をなるべく表に出さないようにするのは幼少期から自信があった。

「状況は一緒です! 私が狙われていて、私の前にアルヴィスさんがいる」

しかしカルラの口調は強まっていく一方だった。

「それじゃあ聞くが、今回の終わりはどこだ? 俺に帝国を潰せとでも言う気か?」

「それは……」

カルラが言葉を詰まらせる。

アルヴィスは多少の罪悪感に苛まれたが、この判断は致し方なかった。

暴走は今までは約一年間隔で起きていたが、今後ともそうであり続ける確証などどこにも無い。その上、これまでの一年というのも前にずれたり、後ろにずれたり、不安定なものであった。

(俺がそばに居ちゃ、守るところか殺しかねえ)

(笑えない話だな、まったく)

アルヴィスは目線をカルラの方にやると、ひとつ大きく息をつき、今にも泣き出しそうな少女の頭に軽く右の手のひらを乗せる。

「そんな心配すんな。しばらくは傍に居てやるから」

「え？」

目を丸くして顔を上げるカルラの瞳は少し潤んでいた。

(どうにもこの表情には慣れん)

「とりあえずどこかの街か村に入れば身を隠せるだろう。そこで腕の立つガードでも雇えばいい」

富も権力も無い少女のために、帝国などという強大な敵を相手に誰が戦ってくれるというのだろうと思うと、アルヴィスは胸が締め付けられた。

しかし、そんなアルヴィスの気持ちとは裏腹に、カルラは顔に満面の笑みを浮かべている。

「はい！　ありがとうございます。やっぱりアルヴィスさんは良い人です」

純粹無垢な笑顔でそんなことを言われ、アルヴィスは心の奥で深いため息をつく、気持ち切り替えた。

「そんじゃまあ、まずは街探しだな」

「はい！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0588z/>

俺は俺を殺すお前を生かす

2011年12月11日05時51分発行